

がん：闘病中の毎日新聞編集者、職場復帰1年 「生きてる」日々かみしめ

2010年12月14日 提供：毎日新聞社

がん：闘病中の毎日新聞編集者、職場復帰1年 「生きてる」日々かみしめ

末期の乳がんを宣告されてからの日々を連載「がんを生きる～ここに在る幸福」（昨年11月掲載）でつづった毎日新聞出版局の三輪晴美さん（46）が職場復帰し、1年が過ぎました。連載には同じように闘病中の読者から多くの反響をいただきました。「応援して下さった皆さんに、元気で働いていますと伝えたい」。本人が近況を報告します。

◇通常勤務、富士登頂も 「人生、自分が作る」実感

治療を始めて2年が過ぎた。現在、いわゆる画像上では乳房やリンパ節にがん細胞は見えない状態だ。しかし骨にはまだ残っているようで、痛みはないが、時々背中に違和感を覚える。それでも、進行は今のところ止まっているらしい。

治療は月1度の点滴（ゾメタ＝骨転移の治療薬）と、3カ月に1度のホルモン剤注射。日々服用するのは、分子標的治療薬（タイケルブ）とホルモン剤、そして経口の抗がん剤（ゼロード）だ。

復帰当初は短時間の勤務だったが、5カ月後には晴れて通常勤務となった。薬の副作用もほとんどなく、「体調はどう？」と問われると、一瞬、なぜそんなことを聞かれるのだろう、と思ってしまう。普段は病気のことを忘れていた時間のほうがずっと多い。

この1年。毎日をかみしめるようにして生きてきた。

以前よりずっと、季節の移り変わりに敏感になった。町で楽しそうな人々の姿を見ると素直にうれしくなる。しばらく音信不通だった知人の何人かとも、付き合いが復活した。キャンサーズ・ギフト（がんからの贈り物）を、すでにたくさん受け取った気がする。

もちろん、生きているからには日々ストレスはある。嫌なことがあると「がん細胞が増えるのでは」とヒヤヒヤしたりもする。幸い、仕事上では病気であるがゆえの不自由を感じることはほとんどない。初対面の人にも、自分の病気については極力打ち明けるようにしている。相手がものを書く立場の人であればなおさら、がんという病気について知ってほしいという気持ちがあるからだ。

それでも時々、ずっと長い夢を見続けているのではないかと思うことがある。がん患者であるという現実を、まだ受け入れられない自分がいるのかもしれない。しかしあるとき

は、何ておもしろい人生になってしまったんだろう、と思う。果たしてこれから自分はどくなるのだろうか。

思いを共有するうえでも、治療の実情を知るうえでも、同じ乳がん患者のブログはありがたい存在だ。しかしこの1年の間にも、そのうちの何人かを見送ることになってしまった。残された言葉はそれぞれだが、いずれも自身の命の終わりを冷静に見つめているように映る。もちろん本当のところはわかるはずもない。「今まで読ませていただいてありがとうございました。いつかどこかでお会いしましょう」と心の中で手を合わせる。きっといつか、どこかで。本気でそう思うのだ。

この秋、主治医の独立開業に伴い、通い慣れた神戸の中央市民病院を転院することになった。最後の通院を終えて海の向こうに広がる神戸の町を眺めながら、入院中、病室の窓から同じ景色を見ては、あちら側の世界に戻りたいと切なく思ったことを思い出した。あれから2年。この夏には職場の元上司や仲間たちと富士山登頂を果たした。「生きてる、生きてる」と自分を励ましながら、一步一步を踏みしめた。先月は1人でヨーロッパを旅した。行く先々ですれ違う見知らぬ人たちを、みないとおしいと思った。叫びたくなるほど気持ちが高揚した。

こうして、がんと生きる日々は続く。一日一日は自分自身が作っていくものだ。だからある日再び困難がふりかかったとしても、その都度正面から向き合えばいい。それしかできないし、それでいいのだ、と自分に言い聞かせている。

これからの1年も、きっと笑顔で過ごせる。そんな気がしている。【三輪晴美】